

るが其内、我國と密接なる關係にある外國の斯業が考察せられてゐるのは周到なる態度と云ふべきであらう。最後の第七章は同組合の最近の行事誌であつて、それ以前の歴史的記述とは稍趣を異にしてゐる。

以上の各章に互つて其記述内容は多分に壓縮を餘儀なくされたとの編者の言葉にもかゝらず、頗る詳細を極めたものであり、亦最近の社會經濟史的研究論文をもよく参照せられた跡が伺へる。然も記述の根據たる史料を煩を厭はず一々引用してゐる事は讀者をして安んじて其記述によらしむるであらう。

但餘りに詳細なる爲煩に過ぎる點がある事は避け難い。例へば第一章に繪具仲間について述ぶるに當つて繪具其物の詳しい解説の存すが如きは親切な態度ではあるが、稍煩錯なる感がないでもない。従つて業界全體の歴史的動きを統一的に概観し得ない憾みがあるが(殊に徳川時代に就いて)「史料そのものを出来る限り詳細に紹介すべき意圖の爲、且つ編纂終了の後必ず尙幾多未見の史料に偶目すべき機會あるを思ひ態と概論的説明を回避した」との編者の言もあるから亦止むを得ない事であらう。(菊羽二四五頁、同組合發行、定價三〇・〇〇)(高谷)

支那と佛蘭西美術工藝

小林 太市 郎著

(東方文化學院京都研究所)

文化交流の現象、それは史學研究上最も興味深く且亦重要な問

紹介

題であるが、支那が古くはセレス・セリカなる名のもとに遠東絹の産地として西方に知られ、或は陸路よりし或は海路よりして間接乍らも東西交通の開けるに應じて次第にその文化の間にも相互に影響するものがあつた事は既に屢々論じられた處であつた。併しこの文化交流の事實に於いても、それが極めて濃厚密接なるものを示す様になつたのは十五・六世紀以來歐洲より極東へ海路の直接開けてよりこの方であつた事は言ふまでもない。然るに此方面の研究を見るにその事情は極めて跛行的なるものがあつて、西洋文明の東方への感化が直接之に關與する我々に取つては極めて著しいものがあつた爲かその研究も精しく進められて居るのに對し、西洋文明に對する東方よりの影響に關しては顧みらるゝ處少く、一般に自己の文化を自負する傾きの多い西歐人に於いてこの方面の研究の乏しい事は言ふに及ばず、我が國にあつても僅かに後藤博士の「支那思想の佛蘭西西漸」と題する論文等あるに過ぎない事情のもとにある。然るに著者は本書に於いて、著者が親しく目前にし觀察せられた所の工藝品なる物自體に即し、又文獻を参照しつつ十八世紀を中心とする佛蘭西の美術工藝に於ける東方よりの影響を明かにし、更にその線に沿ふて之を内界の大局にまでも及ぼされたのであつて、前記の如き學界不振の中にあつて多大の努力を拂はれつゝかくの如き興味あり、重要な研究の分野に對して一步を進め、學界將來の發展に資せられた事は大いに感謝しなければならぬ處であると考へる。

以下本書の内容に關して其概要の大略を記するならば先づ、

第二十三卷 第三號 五九七

第一章「十八世紀の佛蘭西に於ける支那觀と思想界に對する支那の影響」に於いては序論として本書の内容全體を裏づける思想背景の概観を試み、十八世紀以前に於ける西洋人の支那觀より筆を起して常に支那が彼等に文明國として驚異の眼を以て見られて來た事を述べ、耶蘇會士によつて次第にその紹介の精しくなるにつれ、單に旅行記風の紹介より漸次生活思想の内容にもふれて、一つには同會士等が支那布教態度に學問的根據を與へ成功の結果の重大性を強調する爲めに、一つには彼等が朱子學を研究した爲めに、支那を物質のみならず理性的にも極めて進んだ文明國として傳へる事もあつて、やがては文明可否論をめぐつて、ライブニッツ、ヴォルテール、ケネー一派を支那禮讀者たらしめると共に、モンテスキウ、デドロ、ルソー等をその誹謗者たらしめる等波紋をなげ、又支那の禮典問題を中心に耶蘇會の布教態度を發端としてキリスト教内部に物議をかもし、或は支那の年代觀が史學の問題となる等頻りに支那が問題視されて研究され理解され來つた事を述べ、

第二章歐羅巴特に佛蘭西に於ける支那工藝品の輸入に於いては、かくの如く耶蘇會士によつてしきりに支那文化が高次なものとして紹介さるゝ一方、その勝れた文化を實證すべき美術工藝品が續々輸入されつゝあつた實情を論じて、先づ西・葡兩國の極東來航による十七世紀以前の輸入を述べ、十七世紀に入つては、蘭・英兩國の東印度會社の設立を見、更にバンナム・パタビヤ經由の間接貿易によらずして廣東に直接貿易が開かれてより支那品輸入

が著しく活況を呈し、蘭・英を通じてこれらの支那品が佛國にも盛に齎らされた事、更にフランスに於いても東印度會社の極東貿易の計畫が進められ、暹羅とも特殊の國交を結ぶに至つたが失敗に歸し、其後アンフリート號の成功により一時支那品が豊富に直接舶來したが、一般に佛國では國內産業保護政策や政治的關係から貿易は振はず、毎年一乃至數隻を送る程度であつた等貿易の事情に關して實際の物の動きを究明し、

第三章「佛蘭西に於ける支那品及其の模造品と支那趣味の流行」に於いては、かくして頻りに輸入された織物、瓷器、漆器等の支那貿易品、或は佛國直接貿易の不振による需給の不調和を補ふ爲起つた模造工業の作品が如何に佛國上下の間に愛好され流行したかを論じて、先づ當時文化の粹を集め、流行の中心たるべき宮廷生活を中心に考察を進めて、彼の有名なルイ十四世のトリアノン瓷宮は言ふに及ばず、豪壯を誇るベルサイユ宮殿も王の優婉繊細な極東工藝に對する好みからも出發したものであつて、一般に古典的論理的美術が専ら公的生活の莊嚴に用ひられたのに對し、私的生活の藝術的享樂に役立つたものは常に極東趣味であつた事を述べ、更にルイ十五世や攝政オルレアン公、王妃マリー・レシンスカ、マダム・ド・ボンパドウル等の支那趣味、ルイ十六世、殊にマリー・アントワネットの支那品愛好、貴族としてはブルボン公のシャンテー城、其他富豪や藝術家、一般人士の日常生活に於ける支那趣味に及び、當時支那製品が如何にもてはやされ、その繊細な夢幻的な洗練された東洋藝術の感覺が喜ばれたかを述べら

れて居る。而して、

第四章「工藝及び造園に對する支那の影響」に於いては「フランスに於ける染織工業における支那の影響」や「支那瓷器の模倣、それに伴ふ陶器工業の發達」「模造漆工の發達と家具工藝」並びに「金工に於ける支那的影響」更に「支那式庭園の盛行」等の各項にわたつて支那趣味の流行による刺戟と影響によつて佛蘭西工藝の各方面が技術的にも内容的にも如何に變革され、支那品の模倣を契機として發達し、新生活面を開いて行つたかを論じられて居る。而してこれら支那品の愛好や、模造工業の盛行に伴つて彼等佛人の間に如何に東洋趣味が理解され來つたかを述べて、支那絹に見る滑らかにつややかな光澤や落着いた優婉輕妙な觸感、或は瓷器の滋潤玉の如く、繊細な麗質の持つ肌觸りの深い快感、微妙な曲線の形、或は漆器の深淵に臨むが如き深い滑澤とその色調、更にこれらのものゝ上に施される花鳥や人物、草木山川等の自然を題材とした極めて自由清新な文様、それ等の持つ自然愛好の繪畫的風趣、更には西洋式の整一と均勢とをさけて自然の幽邃閑寂を旨とした東洋風庭園、かうしたものを通じて如何に自然に親しみ、自然に生きる心が彼等の内に浸潤して行き、自然愛好の藝術的感觸を培つて彼等の藝術を變へて行つたかを論じられて居る。而して次の、

第五章「室内裝飾に對する支那の影響と支那趣味の室内裝飾畫」に於いては、かくの如く支那趣味を熱愛し、之を樂んだ當時の佛人が、彼等の住居の全體を彼等の調度に調和せしめ、又彼等の趣

味を徹底せしめんが爲に室内裝飾一般にも支那趣味を擴張し、例へば青華白瓷の色調が壁面に移されてトリアノン風の室内裝飾となり、更には青瓷の青色や黃繡子の黄色が喜ばれて室内裝飾の基調となる等頻りに支那工藝品の色彩や光澤が裝飾に用ひられたる様をのべ、普通ロココ美術の主調をなすと考へられて居る青黄二色も、實は上記の如く當時愛用された支那品の特徴的な色彩であつたし、又ロココ風の美妙的な光澤や優美な曲線も、絹の滑らかさや瓷器のもつ輕妙な形、肌色や滑澤等の延長であつたと見るべきであり、更に壁飾りの爲に盛に愛用された花鳥圖や諧謔脫俗的な人物意匠や猿圖の如き、或はロココ美術に特色的な不均制法則の圖式等何れも支那將來品にその緣由を求むべく、或はみづ／＼しいアラベスクと組まれた生氣ある花鳥、人物、猿、或は寫實的な支那風俗畫等に見らるゝ自然への愛顧と繊細な藝術感情、それらは支那製品のもたらした極東趣味の示唆を除外しては到底考へ得られない事を述べて居られる。而して最後に、

第六章「ロココ美術の形成に於ける支那の影響」の章では以上の所論の結びとしてロココ美術を論じ、上記の如くその特色的なる色彩、光澤、曲線、自然感、不均制趣味、飄逸性等の各點にわたつてロココ美術が決して支那工藝品からの影響を無視しては論ぜられない事を説き、或はロココ美術を以て莊重嚴肅な直線式藝術の反動的なるものとして内在的發展論的に之を説明して形而上的に論じ、或は誇張をこそ特色とすべき伊太利パロック様式との間に故意に關連を求め、或は十八世紀の中世否定的態度を無視して

ゴチックの末流と考へられる十五世紀フランソワイヤン様式傳統の發展とする説等、何れも論理的確實性に於いて積極性を缺く事を説き、ロココ様式こそは寧ろ支那佛蘭西式とも稱すべきであつて、そこには東方文明の影響の大なるものがあるべき事を論じられて居る。(菊列五九四頁、挿圖一四五個、昭和十二年十二月、弘文堂書房發行、正價七圓)(岡田芳三郎)

新增東國輿地勝覽索引

末松保和編

ウンスンの件はコレ／＼の本には見えてをらん、といふことを言はなければならぬためにだけでも、何十卷何百卷の本に血眼になつて食ひついてかゝらねばならん苦い經驗は、凡そ史學、特に漚しもない様な尨大蕪雜な資料を抱へこんだ東洋史學の研究に携はるものゝ何時も嘗めさせられるところだらう。索引といふ便利なるものが無いことのためにだけだ。勿論その血眼になることによつて思ひがけない眼福も時に得られないのではないし、さういふことが永い一生學問の道には何よりも爲になるのだと私共は常々大先生方に訓へられてゐる。然し大先生方の訓へ給ふころは決して索引なるものが不要だといふことではない。索引は不可欠に必要だ、必要だが、一度は必ず血眼になつて索引の必要を痛感するまでになれとのたまふのだ。當然のことだが、血眼になつたことのある本であればある程、愈々索引戀しさの念の切であることを誰しもがきつと味はされてゐることだらうと思ふ。然るにこの

索引編纂事業なるものが常に思ひがけない努力と時日、従つて經費とを要する關係から、我が學界の如きにあつても兎もすれば繩子の取り扱ひを受け勝ちで、折角これが編纂に従事するものもあれやこれや、その苦しみの實際想像以上のものであるらしいのは残念と申す他ない。北京の燕京大學が莫大な經費と人員とを擁して引得編纂の専門所を起し、其の成果を續々として世に問うてゐる事實は周知のことだ。強大な米國資本を背後にしてをれば何でもないことだと云つてしまへばそれ迄だが、兎も角これだけの大編纂所を計畫設立し、着々としてその大成績を擧げつゝあることは讚稱に値しよう。もとより數ある引得のことゝ、杜撰粗瀆の噂あるものもないではないが、然し私の研究領分から云つても、「明代八十七種傳記引得」「清代三十三種傳記引得」等の如き、今は手許から遠ざけ得ないこと猶ほ女房の如くですらある。私などは、明清時代の人で、これ等の引得に見當らないものは一應搜索を打ち切ることにしてゐる。

新增東國輿地勝覽索引の編者末松城大助教授は勝覽に血眼になること多年、勝覽に精通すること比類なき人だ。勝覽が朝鮮史研究者に必須不可缺の書であることは言ふ迄もない。氏は日夕勝覽を座邊にして繙くにつれ、勝覽索引編纂の必要であることを屢加的に感じた。氏の座邊には郡名門索引、人物門索引等が次第に冊を成し、終に積むところを整理案排して本索引一卷を纏め上げられるに到つた。全體を一般部、人名部、姓氏部、土産部の四部門に分ち、各部門中の名辭を字音引きに排列した(畫引索引をも添